「消えること」と「忘れられること」は、同じではない。『世界が私を消していく』を読み終えたとき、私の頭に最初に浮かんだのはその言葉でした。私は「消えたい」という気持ちはその場を離れたいだけだと思いました。しかし、この作品を読んでこの言葉の裏には「誰かに傷つけられたくない」「本当の自分をわかってほしい」という、意味があると思いました。

主人公の紗弥は、気になっていた時枝くんと席が近くなったことで、学校が楽しくなっていきます。しかし、仲の良かったグループの関係が崩れ、さらに「SNSの裏アカウントに友だちの悪口を書いている」という嘘の噂まで広まってしまいます。嫌われたくないという思いから必死になる紗弥ですが、その噂は時枝くんの耳にも入ってしまいます。追い詰められた紗弥は、「この世界から消えたい」と強く願います。

しかし翌日、周りの人たちは本当に紗弥と

初めて会ったかのような態度になり、紗弥の記憶も噂もすべて消えていました。紗弥を傷つけるものがなくなり、以前より生きやすくなったはずなのに、紗弥は「もう、忘れられるのはイヤ。私のことを信じてほしい」と強く思います。そんな紗弥のことを、時枝くんだけは何度も思い出し、見つけてくれるというお話です。

最初は忘れられたことによって紗弥は苦しみから解放されたように見えます。しかし、誰からも覚えられていないということは誰かと楽しく過ごした思い出や、仲間とともに協力し合った大切な思い出まで失ってしまうということでもあります。私はこのことが一番印象に残りました。

学校では、友達との距離感を少し間違えただけで、昨日まで普通に話していた人と急に話しづらくなることがあります。私は、紗弥の抱えている問題は作品の中だけの話だとは思えませんでした。私自身も人間関係で悩み、

自分の居場所がどこにあるのかがわからなくなってしまった経験があるからです。

かつて、友達が私の知らないところで私の悪口を皆に言っていたことがありました。仲が良く、一緒に切磋琢磨してきた友達。だからこそ私の悪口を言っていることを知った時はショックでした。「今まで一緒にいた時間は何だったのだろう」「自分はそうずっと思われていたのかな」と、色々なことを考えました。それから私は、学校に行くのが嫌になっていきました。以前は楽しいと思えていたものとなり、自分の居場所がなくなったと感じてしまうようになり、友達と笑っている人を見ると自分だけ取り残されているような気持ちになることもありました。私は、その時の自分と紗弥の気持ちが重なっているように感じました。もちろん、私と紗弥では経験したことも、抱えている苦しさも違います。ですが信じていた人との繋がりが揺らいだ時の不安や自分の居場

所がなくなった感覚には、共感できる部分がありました。

そんな時に私を支えてくれたのは家族でした。私が辛い気持ちの時には、話を聞いてくれたり、いつもと変わらず接してくれたりしました。家族にとっては何気ないことだったかもしれません。しかし、私にとっては、その「いつも通り」がとても大きな支えでした。

自分の味方でいてくれる人がいると思えたことで、少しずつ前を向くことができました。

その経験から私は、人を支えるのは、必ずしも特別な言葉や大きな行動ではないと知りました。ただ話を聞いてくれること、そばにいる事、変わらずに接してくれること。そして、このことが、この作品の中の紗弥と時枝くんの関係にも共通していると感じました。

時枝くんは、苦しさを抱えている紗弥のことを気にかけ、そばにいてくれる存在でした。

紗弥にとって、時枝くんの存在は自分が一人ではないと思えるきっかけになっていたので

はないかと思います。私は時枝くんの姿を見て、人を助けるということは、なにか特別なことをするだけではないのだと感じました。

相手のことを気にかけ、話を聞き、そばにいることも、その人にとっては大きな支えになるのだと思います。私自身も家族に支えられてもらった経験があるからこそ、時枝くんが紗弥にとってどれほど大きな存在だったかを考えることができました。

紗弥は「この世界から消えたい」と願っていました。しかし、願いが叶い、誰からも忘れられた紗弥は、今度は「もう、忘れられるのはイヤ」と願います。この正反対の言葉から私は、人は苦しみから消えたいと思うほど追い詰められても、誰かの心からまで消えてしまいたいわけではないのだと感じました。

人に覚えていてもらうことは、自分が確かに生きている証なのかもしれません。だからこそ私も、苦しんでいる人の存在を見過ごさず、「あなたはここにいていい」と伝えられる人

になりたいと思います。

20 × 20